

第一幕 三条大橋

舞台中央、上手より下手にかけ、大橋の欄干。下手に一本の枝垂れ柳。春の夜で、空に大三日月が輝く。

幕あいて暫時舞台は人なし。程よき時、下手より、抜刀、さんばら髪の黒駒勝蔵、走り出て、橋の中央に立止る。うしろを振り返り、キツとなる。

勝蔵を追って、二人の捕吏、十手をかまえつゝ、下手にあらわれ、じりじりと勝蔵に迫る。

勝蔵 えゝい、うるせえ奴らだ。そばへ寄ると叩つ斬るぞ。

捕吏A 勝蔵。もはや逃れぬところだ。観念して、神妙に縛につけ。

勝蔵 しゃらくせえ。（進み出る捕吏Aに斬りかゝる。A、飛びしきり、再びじりじりと迫る）

この時、上手より、覆面の鞍馬天狗あらわれ、懐手のまゝ、橋の中央を眺め、無言でイむ。

やがて、一步、橋上に歩み出る。

捕吏B おやつ、何だあいつは？やつ、鞍馬天狗だ。兄貴、こいつは厄介なことになつたぜ。

捕吏A 何、鞍馬天狗？こりゃあ、いけねえ。やい、勝蔵。手めえ、運のいゝ野郎だ。よんどころない邪魔が入つたから、今日のところは見のがしてやるが、今度会つたら、百年目だと思え。（捕吏二人、下手より退散）

勝蔵 何を言やがる。（捕吏を見送りつゝからだの緊張、次第にとけ、橋の中央欄干に寄つて、刀を垂れ、息をつく）

その勝蔵の様子を観察する鞍馬天狗。やおら歩み寄る。

天狗 勝蔵とやら。そちも幕吏に追われる身なのか。

勝蔵（面をあげ、天狗を見て）ふん。頭巾などしやがって、けつたいな野郎だ。（身支度をし、刀を収めて、下手より立去ろうとする）

天狗 まあ待て、勝蔵。何者か知らぬが、袖すり合うも多生の縁とか。この天が下に、五尺の身の置きどころに惑う同類のよしみ、今宵は拙者が、安全なねぐらを与えてとらそう。

勝蔵（ふり返る）大きなお世話だ。死のうが、吊られようが、こちとらの勝手だ。こう見えても、甲州一の暴れ者、黒駒の勝蔵だ。棒振り剣術の蔭にかくれて歩いたとあつちやあ、関東の衆に笑われらあ。

天狗 さようか。黒駒の勝蔵と申すか。さあ、拙者について参れ。暖いまゝも馳走しよう。ひさごに酒もみたしてあるぞ。

勝蔵 えゝい、うるせえと云うのに。―だが、お前さんも変つた人だね。がきの時分からしたい放題をし散らかして、人から鬼といわれたこの勝蔵、鉄砲やさす又の御

見舞には驚いたことはねえが、なまじ人臭い扱いに出会々と、ひよんなこと、目の玉から汗みてえなものが出かゝって来やがった。

天狗 さあ、何をつべこべ申しておる。ぐずぐずしておると、最前のような犬めらに出くわすと云うものだ。さあぐ、参れぐ。

勝蔵 へい。妙な話だが、お前さんの云うことをきいてると、何だか、ずうっと小さいせえ頃に帰ったような気がして、ふだんの豪気な勝蔵さんが、どっかへ行っちゃまったようだ。まんざら、ぺてんにかけられる訳でもあるめえ。それじゃあ、今夜はお前さんの巢にもぐって、久しぶりにおふくろの夢でも見るとしようか。

二人、上手に立去ろうとする。先行の天狗たちどまり、前方をすかしみる。

天狗 待て。勝蔵。どうやら雲行きが怪しくなったぞ。――ほほう、今宵は隊長みずからが御出馬と見える。これ、勝蔵。しばしの間、物かげで一服しておるがよい。

勝蔵 え？どうかなすったんですかい。

天狗 しっ、声を出すな。

勝蔵は下手の柳のかげにかくれる。天狗は大橋中央に歩を戻し、悠然と月を見るてい。

上手より、新選組隊長近藤勇、隊士一名を従えて登場。橋にかゝるところで、天狗の姿に気づき、気を配りつゝ近寄る。天狗、上手を向いて、これをむかえる。

天狗 やあ、近藤さんではありませんか。物々しいお支度で、今宵のお目当ては土佐ですか、長州ですか。

近藤 む？その声は鞍馬天狗か。（隊士に目くばせする。隊士は横へ廻って、刀の束に手をかけ、身構える。）

天狗 いやあ、久しぶりですなあ。旧臘中からかけちがって、お目もじせなんだが、相変わらず、（手つきで剣を構える形をする）これの方は、お盛んなようで。

近藤 無駄ばなしの暇はない。天狗、今宵は見のがす故、邪魔はせんで貰いたい。

天狗 と云うと、どうやら、大物が網にかかったと云うわけか。月形くんか、坂本くん？ふむ、土佐ではないな。すると、平野次郎かな。ひよっとすると、ははあ。

近藤 うるさい。何でも構わん。つべこべ申すと、お手前も地獄の道連れにするぞ。そこを退け。近藤勇、まかり通る。

天狗 おっと、近藤さん。拙者、存じ寄りがござってな。その人物、ずばり申そう。長州の桂小五郎。ふむ、凶星のようじゃ。逃げの小五郎の異名通り、この一年というものの、天に昇ったか地に潜んだか、同志のわれらにも皆目行方が知れなんだが、今宵の鴨が桂さんときまれば、どっこい、この天狗にも用事がござってな。むざむざ虎徹のサビにさするわけには参らんわい。（大手をひろげ、橋の中央に仁王立ち）

近藤 えい、面倒。さらば、今宵の血祭りに、まず天狗の首をあげようぞ。（キラリ抜刀して、天狗に迫る。隊士も、及び腰に、これにならう）

天狗 そう来なくてはならんところだ。（抜刀せず、相手の太刀をかいぐどって、上手

と、下手に入れかわる)

近藤 えい、天狗。腰のものはどうした。抜けく。抜いて、正面から、かゝって来い。(猛然と切りかゝる)

天狗 (ひらりくくと、その太刀をかわしつつ、隊士に近づき、その手もとにとびこんで、当身。隊士倒れる) さあ、これで一対一。では、おのぞみにより、鞍馬相伝木の葉返し、久方ぶりに御見に供す。(抜刀して、近藤に迫る。近藤、その氣迫に押され、次第に下手へさがってゆく。柳のかたわらで、近藤一呼吸。切迫した劍氣に、いたまされなくなった黒駒の勝蔵は、近藤のうしろから走り出て、天狗の背後に廻る)

天狗 どうした、勝蔵。

勝蔵 へ、へい。やくざ者同士の度胸一本の斬合いとは、ことかわり、お武家の真劍勝負は、どうも氣づまりでいけねえ。何とか早くかたをつけておくんなせえ。

天狗 (構えた刀を、パチリと鞘に収めて) ははは、氣づまりはよかった。近藤さん、天狗、氣が抜け申した。無益な劍戟沙汰はこれでおひらき。こうする間にも、とうとうたる時の流れは、われらが腕のひとふりなどを呑みつくして、新らしい時代へと動いているのです。